

**名作展「絢爛と健剛 川端龍子の作品における装飾性」の開催**

**併催：町立湯河原美術館収蔵 平松礼二作品展**

**2026年3月28日（土）～6月7日（日）**



（上）川端龍子《龍子垣》1961年、大田区立龍子記念館蔵

（下）川端龍子《草の実》1931年、大田区立龍子記念館蔵

**■開催情報**

会期：2026年3月28日（土）～6月7日（日）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

休館：月曜日（5月4日（月・祝）は開館し、7日（木）に休館）

入館料：一般 200円、中学生以下 100円

※65歳以上（要証明）、未就学児及び障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料。

※4月5日（日）は、馬込文士村大桜まつり開催に伴い入館無料とし、龍子公園を特別開放します。

**■展覧会概要**

「青龍社に采配を振る文句は一纖細巧緻なる現下一般の作品に対しての健剛なる藝術へ向っての進軍である」（註1）

日本画家・川端龍子が（1885-1966）、1929（昭和4）年に自らの美術団体・青龍社を設立した際に掲げたのが、「健剛なる藝術」です。龍子はこのスローガンのもと、30年以上にわたって青龍社において若き日本画家たちを指揮し続けました。「健剛」を象徴する作品制作としては、3.5メートルを超える《一天護持》（1927）に表されたように大画面による作品がその中心をなしています。一方で、《草の実》（1931）や《龍子垣》（1961）のように、金彩をはじめ鮮やかな色彩によって、日本美術において育まれてきた装飾性豊かな絢爛たる作品も龍子は制作しています。本展では、龍子の作品に見出すことのできる「絢爛」と「健剛」をテーマにその藝術觀にせまります。

本展出品の《一天護持》(1927)を龍子が発表したのは、再興第14回日本美術院展(院展)においてでした。この時、龍子はまだ横山大観のもとで院展を活躍の場としていました。しかし、関東大震災の発生や大正天皇の崩御といった時代に、「強靭性に乏しく、いたづらに感傷的で、病的で神経質的一般的傾向に対蹠する、健剛な澁渼たる表現の実践」を龍子は目指そうとしました(註1)。そして、1929(昭和4)年に青龍社を設立すると、「会場藝術」を提唱し、日本画とは思えないスケールの大画面に、豪放な筆使いで描いた作品を次々と発表しました。そのような龍子の制作を評し、美術史家・脇本樂之軒は、「之程の大画面を樂々とこなして綽々(しゃくしゃく)たる余裕を示して居るのは、桃山時代でも永徳以外幾人あろう」と賛辞を贈っています(註2)。

一方で、「会場藝術」は、「大作主義に右へ並へと号令しつつあるものでは無い(註3)」と龍子は明言してもいます。それを表す一作が《草の実》です。紺地に金彩のみで描き上げられた本作は、夏の雑草の生命力が絢爛な画面に表されたのでした。そして、「会場藝術」は大画面の作品制作だけでなく、「桃山時代あたりの障屏画の復興的精神(前掲書)」をもって作品制作に挑んでいるということが示されたのです。その理念は最晩年になっても変わらず、1961(昭和36)年の76歳の時に発表した《龍子垣》においては、金が多用された絢爛な画面に、自らがデザインし別宅に作った垣根「龍子垣」をダイナミックに作品化しました。龍子は日本画を描き始めた当初、「私が共感出来、私のこれからやりたい気持ちに尾形光琳の作品であった(註4)」と語っています。すなわち、琳派の作品に見られるようなきらびやかな装飾性も、龍子の作品をその装飾性から「健剛」に欠かせないものであったと言うことができるのではないでしょうか。本展では「絢爛」と「健剛」という視点から、龍子の作品における装飾性にせまります。



川端龍子《一天護持》  
1927年、大田区立龍子  
記念館蔵

- 註1 川端龍子『わが画生活』1951年、大日本雄辯会講談社  
註2 脇本樂之軒「三展覽會の日本畫(一)」『読売新聞』1929年9月10日  
註3 川端龍子「会場藝術の意義」『塔影』9巻8号、1933年10月  
註4 川端龍子『わが画生活』大日本雄辯会講談社、1951年

## ■町立湯河原美術館収蔵 平松礼二作品展を併催

日本画家・平松礼二(1941-)は、1999(平成11)年に発表した「印象派・ジャポニズムへの旅」が国内外で話題を集め、翌年から月刊「文藝春秋」の表紙画を11年間担当、2013(平成25)年にはフランス公立ジベルニー印象派美術館で「睡蓮の池・モネへのオマージュ」展、2024(令和6)年には「平松礼二—睡蓮交響曲」展が開催されました。また、2025(令和7)年7月就航の郵船クルーズ株式会社が運航するクルーズ船「飛鳥Ⅲ」には、船内を彩る作品を提供しています。現在、華々しく活躍する平松礼二是、かつて川端龍子が主宰した青龍社に在籍していました。1960(昭和35)年の19歳の時、第32回青龍展に《廃船》で入選した平松(当時は本名の邦夫)は、1962(昭和37)年には構成員である社子に推举され、青龍社が解散する1966(昭和41)年まで龍子のもとで教えを受けています。

この度、川端龍子展「龍子の衝撃」(会期：2月6日（金）～4月6日（月）)を町立湯河原美術館で開催するにあたり、龍子記念館との所蔵作品の交換展として、平松礼二作品展を開催し、平松がライフワークとして取り組んだ「路」をテーマとした作品や、その名を響き渡らせた「モネの池」シリーズ、そして、装飾性豊かな屏風作品《東海富士図》(2006年)、《早春図》(2008年)等を展示します。

平松礼二 (日本画家、1941年～)

1960年の第32回青龍社展に初入選し1966年の解散まで出品。

2021年、フランス政府芸術文化勲章シュヴァリエを受章。2017年、愛知大学より名誉博士号を授与、多摩美術大学教授、了徳寺大学学長、順天堂大学客員教授を歴任、2006年、町立湯河原美術館に「平松礼二館」を開館し、現在、名誉館長を務める。



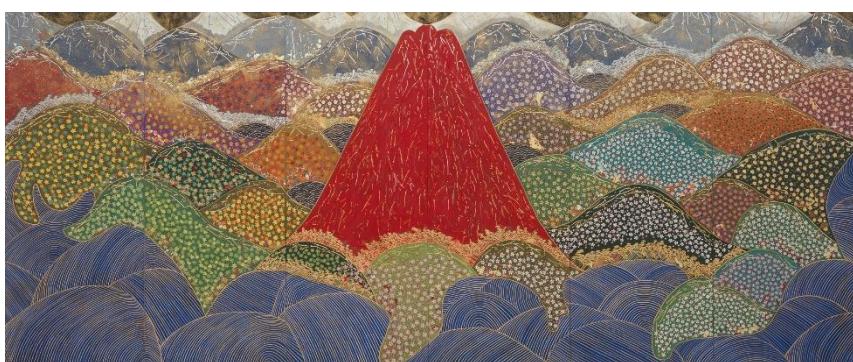
## 主な出品作品



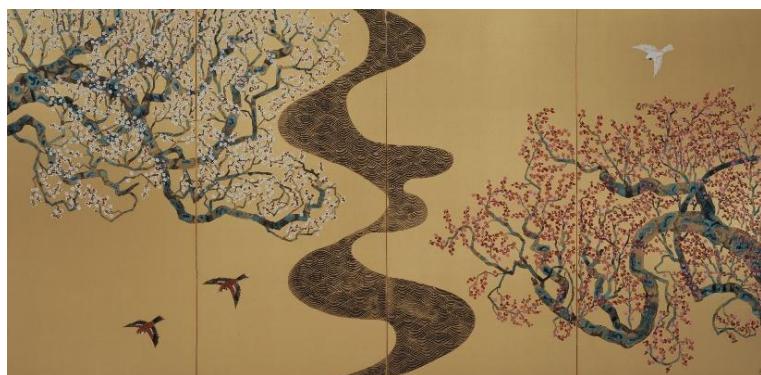
(左) 平松礼二《路 (A)》1977年、町立湯河原美術館寄託

(中) 平松礼二《モネの池・秋冬図》2002年、町立湯河原美術館寄託

(右) 平松礼二《桜花散る・ジャポン》2003年、町立湯河原美術館寄託



平松礼二  
《東海富士図》2006年  
町立湯河原美術館蔵

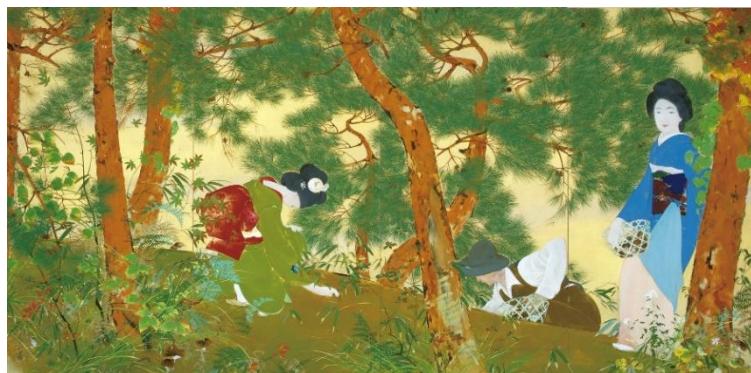


(左) 平松礼二《早春図》2008年、町立湯河原美術館蔵  
(右) 平松礼二《春の光・鯉》2015年、作家蔵

## ■ その他の川端龍子の主な出品作品



川端龍子《孫悟空》  
1962年  
大田区立龍子記念館蔵



(左) 川端龍子  
《水中梅》 1947年

(左) 川端龍子  
《茸狩図》 1936年

ともに大田区立  
龍子記念館蔵



(左) 川端龍子《山百合》 1946年、大田区立龍子記念館寄託

(右) 川端龍子《睡蓮》 1937年、大田区立龍子記念館寄託

## ■ 関連イベント

○ギャラリートーク 学芸員が出品作を解説します。

開催日：4月19日（日）、5月5日（火・祝）、6月7日（日）

各日 13:00から（40分程度）

○対話型鑑賞プログラム「おしゃべり鑑賞会」

開催日時：3月30日（月）、4月20日（月）、5月25日（月）

各日 14:00～15:00 会場：展示室内

○龍子公園（旧宅・アトリエ）のご案内

当館に隣接する龍子設計の旧宅とアトリエが、解説つきでご見学できます。

開館日の10:00、11:00、14:00から（30分程度）

○地域連携事業「風薰る 美術館コンサート」

開催日時：5月24日（日）18:30～19:30 会場：展示室内

○地域連携企画講演会「日本画家・平松礼二氏が語る師としての川端龍子（仮）」

開催日時：5月17日（日）13:30～15:00 会場：大田文化の森（予定）

## ■広報についてのお問合せ

本展紹介のための作品画像の使用に関しては、下記までお問い合わせください。

※作品画像のほか当館の外観や龍子公園の画像もご用意いたします。

※使用に際しては、掲載内容・放映内容を事前に確認させていただきます。

※使用後、掲載誌および放映が記録されたメディアを見本として当館までご送付ください。

## 【お問合せ先】

大田区立龍子記念館 〒143-0024 東京都大田区中央 4-2-1

TEL & FAX : 03-3772-0680 学芸員 木村拓也・青木愛未

## ■アクセス

### ● JR京浜東北線大森駅西口から

東急バス4番「荏原町駅入口」行乗車、「臼田坂下」下車、徒歩2分

### ●都営地下鉄浅草線 西馬込駅南口から

南馬込桜並木通り（桜のプロムナード）に沿って、徒歩15分

